

# 柏尾誠一郎氏「スポーツマンシップと実生活」

テニスミュージアム委員  
共同通信社編集委員  
小沢 剛



日本が初めてオリンピックでメダルを獲得したのは、1920年アントワープ大会のテニスだった。シングルスで熊谷一弥が銀、ダブルスでも熊谷・柏尾誠一郎組が銀メダルである。

熊谷さんは、その翌年、清水善造とデ杯決勝まで日本を導いた人なので、テニス関係者なら知らない人はいない。だが、熊谷さんとのペアでメダルを獲得した柏尾さんはデ杯戦ではほとんどプレーしていないこともあり、印象は希薄だ。

しかし、東京2020大会がコロナ禍による開催の1年延期が決まる前、柏尾さんの信頼する部下だった方の関係先から多様な資料がテニスミュージアム委員会に寄贈された。主なものは三井物産時代の戦前のパスポートやフランス政府発行の身分証明書、上海時代の思い出のメモ、記念の写真を貼ったラケットなどだ。

中でも珍しいのは1962年に亡くなる前年に便箋4枚に記した「スポーツマンシップと実生活」と題した直筆の所感である。64年東京オリンピックへと向かう時代に、ルールを守る意味を説いた。現代にも通用する文意であり、概略を記す。

## 「スポーツマンシップと実生活」

スポーツマンシップとは運動家精神または競技精神とでもいうか卑怯なことはしない、正々堂々とやる 疑わしい点は相手に譲る 物事は一生懸命にやる等 大体何人にも了解されたいと思われるが、それは要するに遊戯をやっているだけのことであって、実世界には通用しないエンのないものと思ってみる人々がまだ相当にあるのではなかろうかと思うので筆を執ってみた。

一体スポーツマンシップとは何かということをおよそ本心に了解しているであろうか。私の思うところでは各種のスポーツにはそれぞれの規則なり規約なりが定められている。内外のスポーツみな同様である。そして、それをやる者はそのルールの文字と精神と慣習伝統の許す範囲内においてあらゆる一(?)を行って相手を打倒するために全力を費やし相手に少しも仮借しないと共に相手から少しのフェバーをも期待しない。このようにして技を争うというのが、あらゆるスポーツの本髄であると思う。もちろん勝敗の結果にこだわってはならない。そのため心の平静を失い見苦しいまねをする事は最も排斥されるべきである。

勝敗にこだわらぬというのと最初からこれを重要視せずに単なる運動をやるというのとは違う。(中略)

運動競技のルールというものは実社会でいうとそれは法律であり慣習であり、また人の道とも言えるであろう。法律やその精神をよく理解し、また人の道を知らずして正しい生活はできない。

運動競技では厳しくルールを守ることを要求されていると同様、社会では法律、人道が要求されている。吾々は社会において法律を知り人の道を知り始めて正しい道を行ける。そしてそこには相手を尊重する民主主義も得られる。

そしてこの範囲において吾々は健全な競争によって社会の進歩を達し得る。競争なくして進歩はない。もちろんスポーツの仲間にはルールを十分に知らぬ者は少ないと言えるが、実社会には単なる運動だけでよいと言う人もあろう。それならそれも自由である。しかしそれは運動競技そのものの本質ではないと私は信ずる。(中略)

オリンピックで実力を十分発揮できなかったと言うのは自分の技術の未熟か精神力の不足にほかならない。練習の時に時々



柏尾氏のパスポート、フランス政府発行身分証明書と「スポーツマンシップと実生活」の直筆原稿

できるような事が、いつも自分ができると思っでは間違いである。

吾々はスポーツマンシップを実社会から離れたもの等とは思わずに社会の秩序、法律、人道をはっきり頭に入れ、他人にあらゆる機会と自由を与え、しかもルール破りの害を受けぬように慎重に行くことこそ吾々の道であると信ずる。

まず我々が相手にあらゆる機会と自由を与えて、これを競争していきたいものと思う。



パスポートには社業で欧州各地を飛び回ったことが分かる各国の出入国スタンプが押されている。そういえば、1920年アントワープ大会は、日本が参加した2度目の五輪で、日本政府は「まだスポーツが国民全般の支持を受けるに至っていない」(日本体協75年史)ことを理由に派遣費用を負担しなかった。このため派遣母体となった大日本体育協会(現日本スポーツ協会)は三井、三菱の大財閥に援助を要請、双方で旅費の半分、3万円ほどを用立てたという。今なら1億を越す額だろう。

柏尾は三井物産、熊谷は三菱合資会社銀行部(現三菱UFJ銀行)に勤務した。当時の日本スポーツ界は人的、物質的に財閥に支えられていたことが分かる。



柏尾氏(右)が映った写真(1935年撮影)をはめ込んだラケット